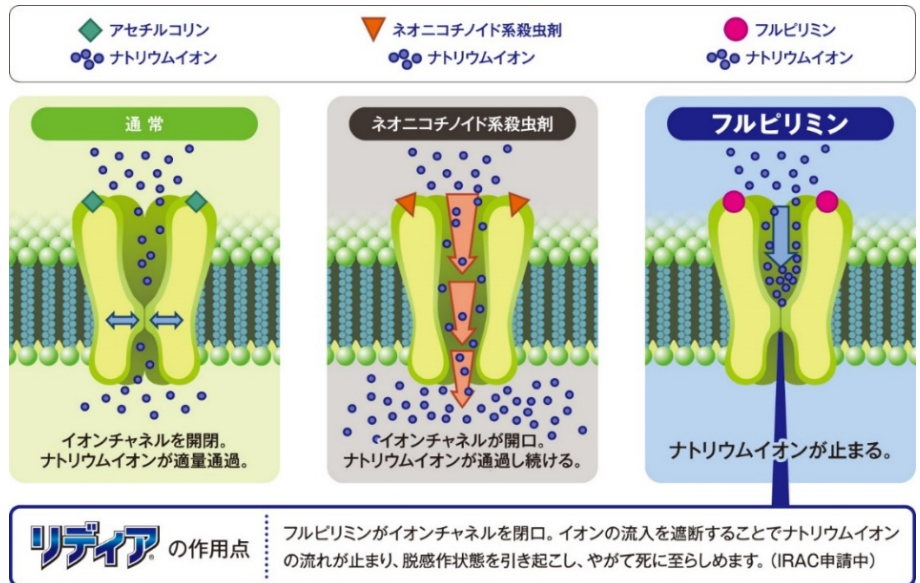


## § 1. 新規殺虫剤「フルピリミン剤」の特性と特徴

今月は、Meiji Seika ファルマ株式会社が開発した新規の殺虫剤「フルピリミン(一般名)」についてご紹介します。本薬剤は、新規作用を有しており、1成分で、初期害虫(イネミズゾウムシ、イネドロオイムシ)、をはじめ、ウンカ類、ツマグロヨコバイ、チョウ目害虫、カメムシ類など広範囲の害虫に効果を示します。

### <「フルピリミン」の特長>

- 1) 新規作用性(現在、IRAC 申請中:Group4 New subclass) : 既存の殺虫剤とは異なる新規の作用機作を有します。昆虫の神経伝達系に作用し、麻痺をひきおこして殺虫効果を発揮します。
- 2) 殺虫スペクトラムが広い : 1成分で、初期害虫、チョウ目、ウンカ類、ヨコバイ、イナゴなど広範囲に防除可能です。また、本田剤(フロアブル)では、カメムシ類、ウンカ類、ヨコバイに同一希釈倍率(1,000倍)で同時防除可能です。
- 3) 抵抗性害虫にも効果あり : 難防除のウンカ類にも卓効を示し、既存剤の抵抗性害虫に対しても安定した効果を示します。
- 4) 環境(水質、益虫)への負荷が少ない  
ミツバチ、クモ、ヤゴなどの多くの有用昆虫や天敵昆虫に対し、影響はほとんどありません。(特に、ミツバチに対して毒性が低い)



### <製品>

- 1) 水稲用殺虫剤「リディア(R)箱粒剤」 : 育苗箱50g施用、移植3日前から移植当日イネミズゾウムシ、イネドロオイムシ、ウンカ類、ツマグロヨコバイ、ニカメイチュウ
- 2) 水稲用殺虫殺菌剤「Dr.オリゼリディア(R)箱粒剤」 :  
いもち病、イネミズゾウムシ、イネドロオイムシ、ウンカ類、ツマグロヨコバイ、ニカメイチュウ、フタオビコガヤ、イナゴ類
- 3) 水稲用殺虫剤「エミリア(R)フロアブル」: 収穫7日前まで、1000倍、60~150L/10a  
ウンカ類、ツマグロヨコバイ、カメムシ類

## § 2. 樹木におけるカイガラムシ防除について

庭木の樹木や観葉植物等で発生するとやっかいな害虫として「カイガラムシ」があります。被害が拡大すると最悪の場合、植物が枯れてしまいますこともあります。今回は、そんな「カイガラムシ」の生態や駆除の仕方をご紹介します。



カイガラムシは昆虫の仲間で、セミ、アブラムシ、カメムシ、ウンカ、ヨコバイの親戚になります。約 400 種以上が確認されており、大別すると、成虫になった時に脚が退化して葉や枝に固着する種類（マルカイガラムシ類、カキカイガラムシ類、ロウムシ類など）と成虫になっても歩き回る種類（フクロカイガラムシ類、コナカイガラムシ類など）がいます。分類上は半翅目に属し、糸のような口吻を葉や茎に差し込み樹液を吸っております。カイガラムシ類の樹木への直接的な被害としては、付着することで美観が損なわれることや、吸汁により生育に悪影響を及ぼします。間接的には排泄物の上に「すす病」が繁殖し、葉が黒くなり、光合成が妨げられ生育が悪くなることがあります。



カイガラムシの防除が難しいのは下記の理由によります。

- 1) 気がついたら大発生になっていること。
- 2) 蠟物質によって虫体が覆われており、薬剤が虫体まで達しにくいこと。
- 3) カイガラムシの種類によって薬剤の効果差が大きいこと。
- 4) 同じ薬剤でも発達段階で効果が異なり、卵や成虫に効果がないこと。
- 5) 産卵期間が長く、孵化が長引くため薬剤の効果が続かないこと。
- 6) 使える農薬が少ないこと。

防除の方法としては、いかに早く発見して対応するかがカギになります。

- 1) こまめに葉裏を確認し、卵を見つけたら布等でふき取ること。
- 2) カイガラムシを発見したらある程度の水圧をかけて水で洗い流すこと。
- 3) 登録のある農薬を使用すること。

しかしながら農薬の使用では、幼虫の発生時期を的確に把握して、虫体に被覆物が十分に形成しない幼虫がピークになる時期に防除を行うことが重要で、使用時期を間違えると薬剤の効果が出ないこともあります。また薬剤の選定する際には、農薬登録内容、ラベル表示をよく確認して使用するようになしてください。

特に、カイガラムシ類の対策としてよく「マシン油」が使用されますが、発売メーカーによっても名称（例：トモノール S、ハーベストオイル、スプレーオイル、マシン油乳剤）や登録内容、濃度等が異なりますので、よく注意して使用してください。